

## 現代版『3人寄れば文殊の知恵』

7月30と31日の両日、英国科学実験講座が市民会館で開催されました。テーマは「冒険！コンピューターの世界」。英国エディンバラ大学教授で、マイクロソフトリサーチ社主席研究員のクリストファー・ピショップ教授がさまざまな実験を通して、コンピューターの世界をわかりやすく紹介してくださいました。教授によると、現在コンピューターは2年で2倍のスピードで性能が進化しており、ウェブページは1秒間に500ページずつ増加しているそうです。

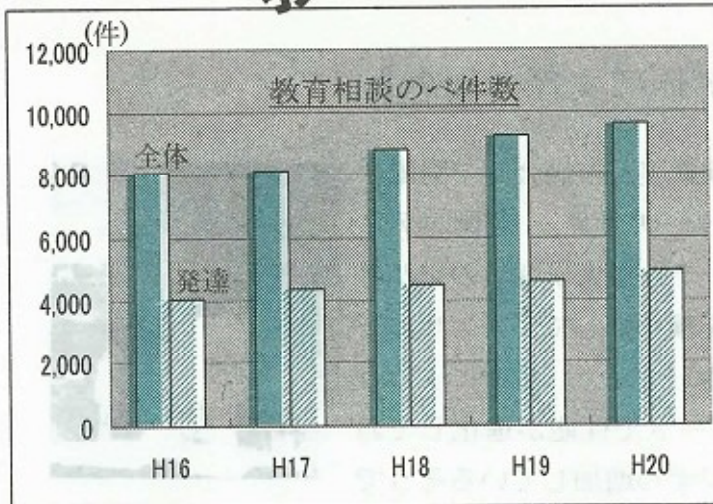


このような情報機器の発展や情報量の増大は、我々に何をもたらすのでしょうか。以前、ちょっとした調べ物をするのにもそれなりの労力が必要でした。また、最新の情報や、第三者の人々の意見等をリアルタイムで知ることは困難でした。さらに、自分の考えを広く発信して他者と交流するような手段はほとんどありませんでした。図書館や博物館には歴史を越えて人類の英知を伝達する役割がありますが、情報機器やウェブの進展はそれを時間軸に沿った縦方向だけではなく、横の方向、つまり同時代に生きる人々にも広く伝達できる手段を確立しました。世界のどこかで生まれたアイデアがその直後に発信され、瞬くうちに多くの人々の知恵によってより良いものに改良されていく、という現象があちこちで起こるようになりました。「三人寄れば文殊の知恵」という言葉がありますが、瞬時に多くの人々の知恵と力を集約できるツールが手に入ったのです。

さて、我々はこのことを教育にどのように活用できるのでしょうか。この情報革命とも言われる状況はまだまだ黎明期であり、全国各地でよりよい活用が試行錯誤されている段階です。もちろんウェブ上にある情報の信頼性の問題について啓発することや、情報モラル・情報安全教育を進めて、これからの情報社会の中で生きる力を子どもたちにつける必要があることは言うまでもありません。

教育現場では今世代交代が進んでいますが、先輩の先生方が培ってこられた実践を継承したり、ある学校の優れた事例を市内全校で共有したりするときにも、校内サーバやとよなかスクールネットといったシステムの活用が可能です。そして授業作りの面においては、学生時代から情報機器に親しんでこられた若い先生方とこれまでの教育実践の蓄積を持っておられるベテランの先生方とが知恵を出し合って、子どもたちにとってよりわかりやすい新しい授業が展開されることが期待されています。教育センターではこれからも教育の情報化を支援していきたいと思っています。(成瀬)

# 学校への支援 教育センターの専門職員たち



教育センター7階では、臨床心理士、言語聴覚士などの専門家が毎日たくさんの保護者の相談や子どもの相談を受けています。

昨年度の相談延べ件数は9,614件。対応ケース数は685ケースで、そのうち、発達に関する相談が、斜線の棒グラフで全体の約5割を占めます。(左グラフ)

そこで、教育相談係では、ケースカンファレンスと教職員研修を通して、子どもへのかかわりや保護者へのかかわりについて、情報発信しています。

## 【 ケースカンファレンスの内容 】

- 参加者  
学校・・・担任、養護教諭等  
センター・・・親担当、子ども担当等  
その他・・・関係機関担当者等

### ○会議の流れ

- 1 自己紹介 ・ 目的の確認
- 2 子どもの状況 (情報交換)
- 3 子どもの関わり方
- 4 今後の対応・役割の確認
- 5 会議を終えるにあたって

★保護者の同意のもとにその子どもについての情報交換を行っています。

★申し込みについては、各学校園長を通してお願いします。

## 【 教職員研修②より 】

6月4日

「学級の中でいかせる人間関係づくり」  
～構成的グループエンカウンター入門～

講師：豊中市教育センター 臨床心理士 西川順也

### <感想より>

・構成的グループエンカウンターということで、実際にやってみてすごく楽しかった。話を聞き、理解することの大切さ、自己肯定感の大事さを感じた。

## 【 教職員研修④より 】

8月6日

気になる子どもへの  
支援のヒント



この表紙でオレンジ色の冊子が学校に配布されています。これをフルに活用するための研修でした！

「学級の中で一人ひとりを  
いかす・支える」  
～気になる子どもへの  
支援のヒント～

★昨年度作成の事例集  
の活用について

講師：豊中市教育センター  
臨床心理士 村田絵美子

●事例検討には豊中市教育センターの臨床心理士 松波朝子・春原千夏の両名もアドバイザーとして入りました。

### <感想より>

・事例検討にファシリテーターが入っていただいたので、課題や解決策の見通しまで持つことができました。  
・見立ての実践ワークシートを活用して話し合うなかで、適切な手だてを考えたりすることができました。

多くのケースカンファレンスで話題になることが、支援を必要とする子どもへの学校でのかかわり方についてです。

カンファレンスでは、視覚的な情報の提示を必要としている子や日常の中で全体の見通しを必要としている子など、様々な子どもに合わせた具体的な支援についてお伝えします。校内には同じような支援を必要としている子どもが他にもいないでしょうか？

**的確なアセスメント(見立て)とプランニングが大切です。そのために…**

- ① 専門職員を入れての校内ケース会議の開催
- ② 子ども理解のための校内研修の開催

をぜひお勧めします。

**教育センターは学校を支援します。**

## 研修内容の紹介①

【 教育相談研修③より 】

7月21日 講義「こうすればつながれる～保護者理解とその対応～」

講師：臨床心理士 井上序子先生

最近、保護者との関係づくりやその対応に苦慮されている現状もみられます。井上先生からは、保護者の背景にあるものや保護者のパターン、保護者との関わり方のサイクル等をお話しいただき、保護者理解を深めることができました。そして、その対処法も・・・。

- \* 初期対応が全てを左右する！・・・先手を打ってフォローを入れ続ける。
- \* 保護者情報の引継ぎを！・・・事実やエピソードでつなぎ、保護者のアセスメントが必要。
- \* 日ごろからよい関係づくりを！・・・ゆとりのあるうちに信頼感を得る、プラス情報を。
- \* チームで対応する！・・・個人で抱えず、組織力、ネットワークを活かす。
- \* 段階に応じた丁寧な対応を！
  - ①要望・要求段階・・・1つのことをめざし、1つずつ積み重ねていく(子どものことで議論)
  - ②苦情段階・・・保護者にまずしゃべってもらい、口をはさまず話を聴く(教育的配慮を探る)

## 研修内容の紹介②

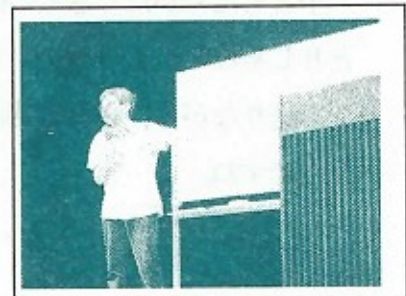
【 夏期教職員研修会より 】

8月27日 講演「学びとコミュニケーションの再生」

講師：劇作家、演出家、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 平田オリザ教授

平田先生の“話の劇場”に引き込まれ、1時間半の講演があつという間に感じられました。その一部をご紹介します。

- \* 人が話をするとき、話をする側は、様々な状況の中で相手に言葉を伝えています。この言葉の背景にあるものをコンテキストと言います。・・・コミュニケーション力のある人というのは、相手のコンテキストを読み取り、相手のコンテキストに沿った形で返すことのできる人のことを言います。また、どのような場面においても、相手に合わせて表現ができるコミュニケーション力を上げるには、様々なシュミレーションを用意することが大切なのです。
- \* 価値観が多様化し、ライフスタイルもバラバラになっている。・・・日本人に要求されるコミュニケーション力の質が大きく変わってきた。・・・バラバラな人間がどうにか一緒にやっていくためのコミュニケーション力が強く求められており、これまでの協調性から社交性が求められていると言えるのです。
- \* 分からない人間同士が共通点を見つけてそれを広げていこうとすることをコミュニケーションと考えます。・・・これから国際社会に生きていかななくてはならない子どもたちほど、日本の協調性の基盤に立ちながら、異なる価値観・異なる宗教・異なる文化の人々と上手くやっていく能力が求められます。フィンランドの授業では、ユニークな意見を言ったかが評価されるのではなく、誰がまとめたかが評価されるという、異なる意見(文化)をどうつないでいくかという力の育成を大切にしています。これも一つの社交性を育てることなのです。
- \* 世界のルールが多文化共生なのです。
- \* コミュニケーション力は、相手に自分の考えや思いが伝わらないという体験から発して、育成されるもの。他者をシュミレートできる、他者を知る、他者を演じ合う、こうした仮想の体験を得られるところに演劇教育のもう一つの役割があると思います。ぜひ多少でもこの要素を授業の中に組み入れていってください。



## ちっぽけで大きな悩み

昨年、中高生を中心に話題になった歌があります。アンジェラ・アキさんの『手紙』という歌です。

この歌は『NHK 全国学校音楽コンクール 中学校の部』の課題曲として作られたもので、アンジェラさんが10代の頃に、30歳の自分に宛てて書いた手紙が元になっています。30歳になったアンジェラさんが封を開けてみると、その中には中学生の頃の小さな悩みがたくさん書き連ねてあったそうです。そしてその手紙を読んで、「もっと早くこの手紙を読んでいればよかった。そうすれば悩みも大したことじゃないと気づいて、もっと強く楽に生きられたのに」と感じたそうです。

「友だちに悪口を言われた」「先生に怒られた」といった、大人からすると「大したことではない」ように見える悩みを、子どもたちはたくさん抱えています。そして子どもたちはまた、「この悪い状態がずっと続くんだ」と悲観的に考えたり、「どうせ自分はだめなんだ」と自信をなくしてしまったりすることも多いものです。そんな時私たちはつい、気にしなければいいのにと感じてしまいますが、それは経験を重ねてきた大人だから言えることで、子どもたちにとっては気にしないということもなかなか難しいのです。

『手紙』には2つのメッセージが込められています。1つは、時間がたてば悩みも小さくなっているかもしれない、と未来を信じるということの大切さ。そしてもう1つは、「自分なら大丈夫！」と自分の力を信じるということの大切さです。

子どもたちが悩んでいる時に本当に必要なことは、周りの大人たちが代わりにその問題を解決することではないと思います。つらいことをつらいと感じて悩めることも大事な力です。たとえ問題がすぐに解決しなかったとしても、がんばった自分を認めることができるでしょう。また、状況が変わっていないように思えても、半年後1年後に振り返ってみると前よりもよくなっていた、ということもあります。そうして少しずつでも悩みと付き合っていく中で、自信がついていくものと思います。

子どもたちがたくさん悩みを抱えているとき、私たちは「ひとりじゃないよ」「大丈夫、乗り越えられるよ」というメッセージを送りながら、必要な時には手を差し伸べて見守っていきたいものですね。

(菊池)

